様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１５日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０７７８
研究課題名（和文）　韓国梵字文化の基礎的研究

研究課題名（英文）Basic study of the Korean Sanskrit Characters Culture.

研究代表者
高　正龍（KO JUNGYONG）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：40330005

研究成果の概要（和文）：
本研究は韓国における梵字が施された文物の研究である。韓国の梵字は日本とも中国とも異なる独自的な発展をするが、韓国の梵字は研究が途絶えて久しく、日本の梵字の知識では判読さえ難しいものも多い。本研究では、梵字が刻まれた文物を集成することによって、韓国の梵字文化の変遷を明らかにしていくことを目的とする。研究の結果、梵鐘資料を中心に、韓国の梵字が時代ごとにどのような文物に、真言、種子が記されてきたか、字体がどう変遷していくのか、韓国梵字文化の大枠を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：
This study is a result of study of the Korean artifacts on which Sanskrit characters are inscribed or casted. In Korea, Sanskrit characters had been developed in a unique way unlike those of China or Japan. Thus the study of Korean Sanskrit characters had been in disruption for a long time, and we find it difficult even to read many of them by the knowledge about Japanese Sanskrit characters. So I am intended to clarify the change of the Korean Sanskrit characters culture in this study through collecting the Korean artifacts on which Sanskrit characters are inscribed or casted. As a result of study, I was able to clarify a outline of the Korean Sanskrit characters culture by examining what kind of artifacts ―mainly Buddhist temple bells― Sanskrit characters words “mantra” or “biijaakSara” had been inscribed or casted, and examining how the character style had been changed in every era in Korea.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：歴史学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：梵字、梵鐘、考古学、韓国史、仏教学、美術史

１．研究開始当初の背景
日本においては、梵字を研究する悉曇学という仏教学の一分野が確立しており、現在もなお仏教を通して梵字は比較的身近なもの

として存在している。これに対して韓国のそれは、朝鮮時代のある時期に継承されないまま、梵字への理解は全く途絶えている。例えば僧侶にいくつかの梵字を見せると、すべてオンで印度の文字だと説明する。つまりオンが梵字の代名詞となっているのである。また美術史において仏教美術に梵字があっても、単に梵字が施されているという説明で終わっている。梵字への関心がないため、写真等で梵字の全容が示されておらず、どのような梵字が記されているのかさえ直接資料にあたらなければ把握できない状況にある。また、まれに梵字への説明があったとしても、日本で出版された梵字の手引き書から、それを個別の様々な仏をあらわす種子と理解して解説を試みるだけで、的確なものは少ない。そのような状況下、申請者を中心に平成 17 年より東アジア梵字文化研究会を立ち上げ研究を進めてきた［高正龍・小林義孝・田村信成・松永俊輔・松波宏隆・三木治子・山川公見子・横田明（東アジア梵字文化研究会）「韓国梵字資料調査（全羅南道編）」『歴史考古学』第 59 号、2008］。

２．研究の目的

本研究では、東アジア世界における梵字文化の全体像を解明する一環として、考古学的方法により朝鮮半島における梵字資料の集成と分析、検討を行う。屋瓦、梵鐘、石造物、仏像の納入品、香炉・銅鏡などの青銅製品など、朝鮮半島で伝世、出土した仏教的文物を中心に、梵字が書かれた遺物について集成することによって、朝鮮半島における梵字文化のアウトラインを明らかにしていく。さらに、研究の進んでいる日本の梵字文化との比較研究を行うことで、朝鮮半島における梵字文化の性格と特異性を理解し、このことにより朝鮮仏教の一面を新たに明らかにできればと考えている。

また、朝鮮半島では、悉曇に近いもの、ランチャ、韓国独自の字体など、複数の字体が使用されているのが確認されている。それぞれの字体で表された内容やその時期を、それが記された仏教文物の製作時期によって明らかにすることは、朝鮮半島における梵字文化さらには仏教の変容の歴史的理解にも貢献するものと考える。

３．研究の方法

（1）東アジア梵字研究会では、勉強会を月１回、韓国での現地踏査を年１回実施してきた。座長を申請者が担当し、三木治子・松永修輔・田村信成・山川公見子（以上歴史考古学研究会）、小林義孝・横田明（以上大阪府教育委員会）、松波宏隆（龍谷大学）などが中心メンバーとして 10 名ほどで運営してきた。他のメンバーが科学研究費の応募資格を有しないため、本件は個人申請にはなっているが、実際にはこれらの諸氏とともに行う共同研究である。研究会のメンバーは研究協力者として本研究に参加する。

（2）本研究の第１の作業は、朝鮮半島の梵字文化がどのような広がりを見せるのか、韓国の梵字資料の集成を行うことである。梵字資料としては、密教真言の集成である『真言集』『造像経』といった経典、主に仏像の納入品として納められる呪符・真言の類、石塔・浮屠といった石造物、堂内の柱などの部材や須弥壇や天井の荘厳としての梵字、屋瓦・塔塼などの瓦塼類、梵鐘、香垸（金山寺香炉）、銅鏡、青磁製品などがある。

これらは各博物館・美術館から発行されている図録類、建築の実測調査報告書、遺跡の発掘調査報告書などを丹念にあたり、カード化して整理・集成を行う。

（3）後述するように梵字の内容は真言が多く、写真一面だけでは内容を正確に理解できないことが多い。（2）の作業を基礎として、調査が必要なものは、韓国現地で調査を実施する。可能であれば写真だけでなく実測・拓本など行う。なかでも梵鐘については紀年銘のある資料も多く、その変遷を検討する必要から悉皆的な調査を行う。また屋瓦についても、瓦当形態、製作技法、文様などから年代を推定できると考えられる。梵鐘と屋瓦については重点的に調査を進めていく。

（4）ここで得られた基礎的な資料をもとに、韓国で刊行された『真言集』『造像経』などとの照合により梵字の内容の把握に努める。あわせて各遺物の編年を行ない、時期を明らかにすることによって、梵字の内容や字体の変遷を検討する。ついで仏教文物等に記された梵字の仏教教説の中における位置付けを明らかにし、朝鮮半島における梵字文化の仏教史的な意味を考察する。

４．研究成果

（1）これまでに韓国の梵字が施された資料として確認したのは、高麗（特に後期）・朝鮮時代の仏教文物がほとんどを占める。その中で、葛項寺石塔の舎利容器から発見された陀羅尼は統一新羅時代まで遡る可能性があるが、極めて限定された資料である。

これまで韓国の梵字は、

①紙類として経典（仏典）・陀羅尼・呪符
②石造物・石製品として石塔・浮屠・墳墓外護石・墓誌
③土製品として瓦塼・陶磁器
④金属製品として銅鐘・香炉・銅鏡・風鐸・金鼓
⑥木製品として竹篦・疏台・版木

⑦仏画
⑧木造建築の丹青、
⑨漆器
⑩仏像
⑪仏像納入品
⑫木棺
⑬服飾
といった多様な文物から確認されている。

その中で仏像納入品の中には梵字が印刷された陀羅尼を含み、喉鈴筒にも梵字が書かれるのが一般的である。また、朝鮮時代の銅鐘で、香炉も高麗時代から朝鮮時代の多くに梵字が施されている。

しかしながら、他の文物では梵字があるものが極めて少ない。たとえば、石造物は日本では普遍的ではあるが、韓国では現在のところ、浮屠で 17 基、石塔で９基しか確認されていない。このような両国の違いが、その記された梵字の内容とともに梵字に対する考え方の違いを反映するものとかんがえられるが、両国の様相の違いが何に基づくのかはいましばらく考究の必要がある。

（2）梵字の内容は、種子と真言に大別できるが、韓国の梵字は種子が少なく、真言を記すことが圧倒的に多いのが大きな特徴となっている。真言には六大明王真言（om ma ni pa dme hum)、破地獄真言（om ka ra te ya sva ha)、浄法界真言（om ram)、准提真言(om ca le cu le cun di sva ha bhrum)、法身真言（am vam ram ham kham)、三密真言（om a hum）などが主として用いられる。

この中で韓国の真言を代表するものが六字大明王真言で、もっとも普遍的に使用されている。この真言は現在でも最も多く寺院などで読誦される真言である。その由来には諸説あるが、現在でもチベットでも多く使われており、元の侵攻とともに韓国に流入したものとかんがえられる。

種子には四天王（dhr vi bhai pa[pha]）をあらわすものが見られる。浮屠や墳墓といった石造物の４方向に配置されており、四方を守護する意味と理解される。

また、om が１字だけで使われることが多いが、これは種子とかんがえるよりは、真言のほとんどが om から始まることからそれを象徴した可能性が高いと判断している。om を図案化した宝珠のような紋様を使うことも多い。なお、真言は語順通りでないものも少なくなく、意味が把握できないものも多くあり、課題は多い。

（3）韓国梵字は様々な字体の使用が確認されている。一つは悉曇に近いもの、一つは『真言集』に近いもの（以下、真言集体とする)、一つはチベットで使われているランチャ(Lan-tsha）に近いものである。

韓国梵字の基本的な流れは悉曇に近いものから真言集体への変化である。真言集体と言っても異体字や誤用も多く判読できないものもある。真言集体はランチャの影響を受けて変容した韓国独自の字体ということができるが、オリジナルなランチャも併用されていて、複雑な状況を呈する。

復古的な字体もあり、一概には言えないが、字体によりある程度時期を絞り込むことができることが分かってきた。中には高麗時代と言われてきたものに、朝鮮時代の梵字が刻まれた事例もあり、年代観を修正すべき遺物も出てきている。

なお、『真言集』に使用される主要な梵字 680 字のフォントを作成し、研究者の便宜をはかった。

（4）韓国梵鐘の中で梵字が用いられるのは約 140 例で、そのうち高麗後期鐘(1147～1392 年）が８例、朝鮮前期鐘（1392～1600 年）が９例あるほかはすべて朝鮮後期鐘（1601～1900 年）である。おおざっぱな傾向を指摘すると、前半の 1700 年までは六字大明王真言が主流であり、その後は om の単独使用が顕著になる。それ以外としては初期には宝楼閣真言が、新しい時期には准提真言が目立つが多数にはならない。

六字大明王真言のもっとも古いものは演福寺鐘（1346 年）で、主真言は尊勝陀羅尼であり、普賢、文殊とともに併記される。ついで洛山寺鐘・奉先寺（ともに 1469 年）に六字と破地獄真言が併記される。水鐘寺鐘（1469 年）は六字大明王真言のみであるが、初期のものから破地獄と併用されていることが確認できる。また、六字大明王真言をもつものには極めて特徴的な二つのグループを指摘することができる。一つは鋳工の名により「浄祐型」とするもので、上段に六字大明王真言と下段に破地獄真言を彫り上下２段各１文字で一つの鋳型をなす。破地獄は字数が１字多いので、最後の１字は常に省略され、異体字など共通要素が多い。浄祐型は最も古い紀年が 1625 年、最も新しい紀年が 1788 年で、鋳工は浄祐から李万重へ変化があり、これが同一系列の集団である可能性が指摘できる。もう一つは同様に「思印型」とするもので、浄祐型と同じ特徴をもつ鋳型をもつが、上下ともに六字大明王真言で、冒頭に真言名を漢字で六字大明王真言ならびに破地獄真言と記す。紀年は 1670～1687 年と短く限定されており、在銘のものはすべて鋳工は１例を除き思印である。

om の単独使用は、すでに高麗後期無名鐘の湖巖美術館鐘が om らしい梵字を４個刻んでいる。朝鮮前期は３例で 18 世紀以降は主流となる。特異な傾向として 1759～1776 年の紀年鐘の内、１例を除き、om が円輪を蓮華紋

か鋸歯紋でとりまく意匠となる。
　梵鐘の字体は、吾魚寺鐘（1218 年）、扶餘博鐘(戊戌年:1238 年)は悉曇、演福寺鐘(1346 年）はランチャとチベット文字が使用されている。また普光寺鐘（1634 年）にはランチャと真言集体が併用されている。普光寺鐘の頃までは梵字は肉太に陽刻される場合が多く、字体も悉曇に近いという特徴をもつ。

（5）韓国における踏査では、古鏡（松広寺博物館)、韓盛旭（民族文化遺産研究院)、金大煥（江南歴史文化研究所)、嚴基杓（檀国大学校)、金秀賢（大邱広域市）ら美術史や考古学を専攻する研究者と同行し、議論を深める機会があった。これによって、これまで紋様としてのみ理解されてきた梵字を、その字体を読み説くことによって、新たな展開を期待できることを理解してもらい、一部で韓国でも梵字を施した文物についての専論が見られるようになった[嚴基杓「高麗－朝鮮時代梵字真言が刻まれた石造物の現況と意味」『歴史民俗学』36、2011 など]。
　また、平成 22 年には金秀賢氏を京都に招請し、梵鐘の検討をもった。これによって、梵鐘を製作した工人グループごとに梵字の様相もグルーピングできる可能性が指摘され、梵鐘研究に新たな視点をもちこむことが可能になった。

（6）３箇年にわたり、梵字を求めて韓国踏査した寺院や博物館・美術館は以下の通りである。
　平成 21 年度：京畿道・忠清道地域。修徳寺・報徳寺、麻谷寺・甲寺・白蓮寺・奉元寺、霊塔寺・影浪寺・国立中央博物館・鍾博物館、延世大学博物館・梨花女子大学博物館など。
　平成 22 年度：江原道・慶尚道地域。月精寺・上院寺・喜方寺・水多寺・南長寺・龍門寺・吾魚寺・銀海寺・宝鏡寺・威徳大学博物館・祇林寺・青松寺・梵魚寺など。
　平成 23 年度：忠清道・全羅道地域。清州大学博物館・忠清大学博物館・寧国寺・安国寺・勝蓮寺・百丈庵・実相寺・玉泉寺・達成寺・仏甲寺・万淵寺など。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①高正龍「韓国慶州徳洞廃寺の梵字塼考」『琵琶湖と地域文化、林博通先生退任記念論集』、査読なし、2011、378－384
②高正龍・小林義孝・田村信成・松永俊輔・松波宏隆・三木治子・山川公見子・横田明（東アジア梵字文化研究会）「韓国梵字資料調査（2007・08 年調査)」『歴史考古学』第 62 号、査読なし、2010、1－87
③高正龍「浮石寺の瓦塼と修理工事の製瓦場」『釜山大学校考古学科創設 20 周年記念論文集』、査読なし、2010、1007－1022

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.geocities.jp/bonjibunka/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
　高正龍（KO JUNGYONG）
　立命館大学・文学部・教授
　研究者番号：４０３３０００５

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：